

〔論文〕

『1Q84』の世界

— 喪家の犬の魂 —

神野 壮人・丹羽 章

— 目次 —

- 一 小森説への反論
- 二 喪家の犬
- 三 視線の行方
- 四 二つの月
- 五 救われる者、救われない者

GINNO, Akito 梅光学院大学院博士前期課程
NIWA, Akira 四国学院大学文学部教授

要旨

村上春樹『1Q84』は、人が否応なく背負わされた運命のなかで、如何に生きるかを問う物語である。本稿では、先行研究の確認をしつつ、小森陽一の批判に反論する形で、村上春樹の現代性について考察する。ついで、青豆、天吾に次ぐ主人公の牛河が如何なる人物であり、如何なる状況に置かれているか、そして如何なる変容を遂げたかを明らかにする。その上で、牛河の死の解釈に一石を投じたい。

キーワード：牛河 無力感 不条理

一 小森説への反論

村上春樹『1Q84』^①は、全三巻からなる長編小説である。物語は、一九八四年の日本と、その世界とは異なる「1Q84」を舞台とし、〈BOOK1、2〉を青豆雅美と川奈天吾、そして〈BOOK3〉からは牛河利治の視点を交えつつ進行する。

〈BOOK1、2〉では、スポーツ・インストラクターとして勤めながら、「柳屋敷」の女主人から代理殺人を請け負う青豆が、宗教法人「さきがけ」のリーダー、深田保を殺害する。それと同時に青豆はなぜか妊娠しており、彼女は、胎内に宿したのが天吾の子であると信じて疑わない。また、小説家志望の予備校講師の天吾は、編集者の小松に唆され、深田絵里子（ふかえり）の小説『空気さなぎ』を書き直す。が、そのことによつて天吾とふかえりは、さきがけが信奉する「リトル・ピープル」と呼ばれる超自然的な存在と敵対してしまう。その間に二人は性交し、それが青豆の受胎に結びついたことが示唆される。その一方で天吾は、認知症で入院中の父親との和解を試みる。

〈BOOK3〉は、さきがけに依頼されて青豆を追う牛河が、ともに愛し合いながらも、再会することのかなわなかつ

た青豆と天吾を結果的に結びつける。そして二人は、1Q84の世界からの脱出を果たす。その一方で牛河は、青豆の仲間である田丸健一（タマル）によって無惨に殺されてしまう。が、牛河の魂は空気さなぎに変容する。

従来の『1Q84』論は、賛否が真つ二つに分かれてきた。主な肯定派として、加藤典洋が「私はこの小説は、現在の他の小説家の作品とは『桁違い』、『隔絶している』、それくらいにすばらしい」と述べ、その理由として「『エンターテインメント』性を一つの文学的手法がかりにした、新しい試みであ」ることを指摘している。また内田樹は、「『父』が前面に登場してきたこと」を指摘し、「『1Q84』は、困難な歴訪の果てに、主人公たちが『邪悪で巨大な父』という表象そのものを無効化し、『父』を介在させて自分の『不在』を説明するという身になじんだ習慣から抜け出したと述べている」。

その一方で、否定派の宇野常寛は、「〈BOOK3〉における『暴力』という主題の後退は著しい」と述べ、ナルシズムの記述とコミットメント「の接続が、少なくとも現時点ではほぼ完全に失敗し、ナルシズムの記述法のみが残った」と結論づけている。また小森陽一は、

私が言いたいのは、村上春樹のこの小説のこの謎はこういうことだ、といい大人たちが議論する、そこに何か意味があると思ってしまうこと自体が、反小説なことではないかということです。ブランド化された小説の細部について、さも大事な話題でもあるかのように議論をして、現実にかけている問題には意識を閉ざす。それは、はたして小説というジャンルが近代に持っていた言葉の役割なのか、小説は現実から逃避するためのものだったのか、という疑問です⁵

と苦言を呈している。

しかし、以上のような小森の批判は、小森自身が明言しているように、文学が「近代に持っていた言葉の役割」⁵に過ぎない。つまるところ小森の射程は、現代文学には届いていないのではないか。原爆投下やアウシュビッツ大虐殺以後、近代のヒューマニズムは跡形もなく崩れ去り、神が絶対的でない時代が訪れた。その中であつて、村上の作品は、長らく神Ⅱ父の不在、意味づけるものを欠いた世界を描いてきた。そうした世界の構造そのものの大きな揺らぎは、必然的

に人間の自我にも及ぶことになる。小森が念頭に置く夏目漱石でさえ、主人公の主体は不安定であるが、現代の主体はさらに一層の不安定性の中に投げ込まれる。小森のいうような「時代への参加」は、大きな困難を伴うのだ。あの天吾の父の異様なまでの、NHKの集金への執着ぶりは、現代人の寄る辺のなさや不安定さを反対側から照らしているのである。この主体性の揺らぎは、一九七〇年代以後、更に深まることになる。その時代こそが、村上の生きた時代であり、また村上文学の通奏低音が作られた時代である。本作に則していえば、深田保の友人で文化人類学者であった戎野隆之の口からこう語られる。

六〇年代も終わりに近づくにつれて、世の中がだんだん臭くなってきた。七〇年代安保に向けて学生運動の高まりがあり、大学封鎖があり、機動隊とのぶつかり合いがあり、血なまぐさい内部抗争があり、人も死んだ。

さらに七〇年代の終わりには、左翼思想という大きな物語のリアリティーが失われ、その代わりにオウム真理教に代表される新興宗教が台頭してきたのが一九八四年であった。それと並列するように、作品は架空の世界（1Q84）を置く。そのことが意味するのは、現実と内的世界の反転である。

一九八一年の初秋には、それほど大きな事件は起こっていなかった。その年の七月にチャールズ王子とダイアナが結婚式をあげており、その余波がいまだに続いていた。（中略）しかしそれについてとりたてて興味は持たなかった。（中略）十月六日にはエジプトでサダト大統領が、イスラム過激派のテロリストに暗殺された。（中略）しかしそれは現在彼女が直面している問題とは関係のないことだ。

彼は考えることをあきらめて駅の売店で買った新聞に一通り目を通した。（中略）インディラ・ガンジー首相の暗殺によって引き起こされたインド国内の騒乱はまだ続いており、多くのシーク教徒が各地で惨殺されていた。日本ではりんごが例年になく豊作だった。しかし天吾の個人的な興味を惹く記事はひとつもなかった。

すなわち、天吾や青豆にとつては、現実起きた社会問題よりも、内的な虚の世界で直面した問題に如何に対応するかが切実に問われている。村上の言葉を借りるならば、「今ある実際の世界の方が、架空の世界より、仮設の世界より

リアリティーがない」のだ。そうした「リアリティーの欠損」⁷がもたらすのは、人間的な何かが壊れた地平である。ここでは突然に人が失われ、いたずらに性的な関係が持ちだされる。あるいは唐突に酷く暴力的なことが起こり、人々はそこに否応なく巻き込まれる。そのような中で、人が如何に生きるか、あるいは救済されるかが描かれているのである。たとえば、青豆と天吾は次のように述懐している。

彼女は混乱していた。自分のあずかり知らないところで、自分のあずかり知らないことが次々に起こっている。少し前まで、世界は彼女の手の中に収められていた。これという破綻も矛盾もなく。しかしそれが今ではばらばらにほどけかけている。

翌日目が覚めたとき、世界はまだ無事に続いていた。そしてものごとは前に向かって既に動き出していた。前にいるすべての生き物を片端から轢き殺していく、インド神話の巨大な車のように。

換言すれば、近代では自分中心に巡っていた世界が、中心点を失い、現代では自分が巨大な世界に振り回されるのだ。つまり村上の作品全体が社会のメタファーになっているのである。

かつてC・G・ユングは、芸術家について次のように述べた。「彼は普遍的人間なのである。無意識のうちに働いている人類の魂の、彼は担い手であり形成者なのである。これが彼の公務にほかならない」と。二〇〇九年二月、村上はエルサレム賞受賞のスピーチにおいて、「私が小説を書く理由は、煎じ詰めればただひとつです。個人の魂の尊厳を浮かび上がらせ、そこに光を当てるためです」と語った。つまり村上は、ユングがいうところの〈魂の代弁者〉に他ならない。

とはいえ、村上個人の思想と、村上文学の思想とが相反するという批判もある。たとえば島田裕巳¹⁰や黒古一夫は、「エルサレム賞の授賞式でのスピーチ『壁と卵』と『1Q84』の内容が矛盾している」と述べた。つまり両者の主張によれば、村上のスピーチは、システムという壁ではなく、卵のように脆い人間の側に立つという内容であったが、『1Q84』において善と悪、あるいは人間とシステムは、混然一体のものとして描かれている。これでは卵どころか、

システムの側に立っているのではないか、少なくとも、卵側の小説としての機能を果たしていない、という。しかし、小説から作家の思想を抽出するのは危うい。なぜなら『1Q84』に描かれた物語内容と、作者の思想が一致するとは限らないからだ。物語は物語自身の論理によって展開するのである。いずれにせよ、村上個人の思想と、『1Q84』に描かれる思想の乖離を根拠とした社会性を有無する批判には再考の余地があるのではないだろうか。

たしかに『1Q84』は、小森のように自我とそれを取りまく世界との摩擦に焦点を絞って評価すれば、日常的レベルの細部に拘ることとなり、周到に用意された謎が上滑りしているかのように見えるだろう。しかし河合隼雄が指摘しているように、日常レベルの論理を越境した地点に村上文学は成り立っている。それはつまり村上が、「個人をはるかに超出して、人類全体の精神と魂から、人類全体の精神と魂を代弁して語」(C・G・ユング)りえているからだ。だからこそ村上文学は、現代文学としては例外的なまでに読まれてきた。そうであるとすれば、村上文学は現実の問題に意識を閉ざしてはいないのである。

二 喪家の犬

その是非は措くとしても、小森の批判は、石原千秋の「BOOK3はまちがいがなく川奈天吾と青豆雅美の『恋愛小説』である。BOOK2まで太い骨格をなしていた社会性は背景に退いた」という指摘に呼応したものであつたらう。すなわち、毀誉褒貶の違いはあるにせよ、本作は、天吾と青豆を中心にして論じられてきたといつてよい。しかし(BOOK3)には、青豆、天吾に次ぐ主人公として、牛河が登場する。にもかかわらず、牛河は、青豆と天吾のラブロマンスを成立させるための(狂言回し)に過ぎないと軽視されてきた。

したがって先行研究では、「牛河は天吾のナルシズムの記述の完成(青豆との再会)のためのキーパーソン、さらに言えば『生贄』(宇野常寛)として位置づけられてきた。つまり牛河は、青豆と天吾を再会させるために殺されたといふことになる。また田堂都司昭は、宇野同様に牛河を「物語展開のために必要な踏み台、捨て石とし」ながらも、その

特性を「探偵」と指摘している。しかしそれだけではない。たとえば中村三春は、探偵としての牛河とは違った角度から、三つの要点を指摘している。第一に牛河が、「青豆と天吾に強く共感を覚えていること」^{①7}。第二に牛河は、「ふかえりを愛し」^{①8}ていたこと。第三に牛河が、「青豆・天吾らが属する『空気さなぎ』世界のシステム内部に組み込まれた」こと。ただし後述するように、牛河がふかえりを愛したとはいえないのではないだろうかという疑問は残る。

また飯田裕子は、『ねじまき鳥クロニクル』における牛河との二つの大きな変化を指摘している。以下、飯田説（「牛河」という「子供」―『1Q84』のもう一つの物語―『村上春樹と小説の現在』和泉書院二〇一一年三月）を要約すると、第一に、DVが原因で妻子が去ったのにたいして、『1Q84』では、はっきりした理由なく妻子が去っていること。第二に、父親が豊職人で牛河自身も学歴のない男として登場していたのが、『1Q84』では、裕福な医者一家の息子で弁護士になっていること。この二つの書き換えによって、牛河は、天吾や青豆と同じ「子供であること」によるトラウマを抱えた存在になったというのである。

すなわち飯田は、牛河が、否応なく背負わされた運命のなかで、如何に生きたかを問うているといつてよい。その牛河の背負わされたものとは、その醜い容姿に他ならない。

牛河は背の低い、四十年代半ばとおぼしき男だった。胴は既にすべてのくびれを失って太く、喉のまわりにも贅肉がつかかかっている。（中略）歯並びが悪く、背骨が妙な角度に曲がっていた。大きな登頂部は不自然なほど扁平に禿げあがっており、まわりがいびつだった。

牛河の容姿と特性は、その動物性と深く結びつくものだ。たとえば牛河には、「動物的な嗅覚」と「本能的な勘が具わって」おり、「しがみついたら放さない粘り強さ」を身上としている。くわえて牛河にまつわる描写には、種々雑多な動物が頻出する。数えあげると、百足、蛤、羚羊、犬、蛇、亀、鮫、毛虫、栗鼠、蟬、蜘蛛、蜂、芋虫、狼と十種は下らない。そもそも彼の名前には、「牛」の一字が刻み込まれている。なかでも再三にわたって登場するのが「犬」であり、彼は自らに「雨に濡れた疥癬病みの、尻尾のちぎれた犬」を重ねている。牛河の周辺人物に目を向けても、彼は、情報収集を依頼する相手を「コウモリと名付けていた」り、ふかえりを鳩、異国の蝶々、鳥に例えている。前者の「コ

ウモリ」に比べると、如何に牛河がふかえりに好意的であるかがわかる。いうまでもなく、蝶や鳥は魂の象徴に他ならない。

すると牛河は、ふかえりに自らの「魂の影」を見ていたことになる。そして少女を目にした牛河は、「自分が一人ぼっちであることを」改めて痛感した。かつて家族からも疎外されていた牛河少年には、「飼っている犬のほかに友だちも」おらず、成人後妻子と一匹の犬と暮らした中央林間の一軒家の記憶さえも、今となつては疑わしい。牛河に残されたのは、「二人の娘に送りこまれたはずの自分の遺伝子」だけである。

こうした状況に置かれた牛河は、自らを守るために「皮膚を厚くし、心の殻を固くし、(中略)有能で我慢強く無感な機械」であろうとした。これが彼のもう一つの側面である。ここでの牛河は、「論理的で明晰な思考能力を持ち、雄弁な人間」である。つまり牛河は、精密な理性と動物的な感性を両立することができる。なおかつ牛河少年は一人二役を演じて、一つの命題をめぐって相対する立場から議論することによって、「彼は知らず知らず、自己を懐疑する能力を身につけて」ゆく。したがって牛河の精神的基盤は理性、感情、懐疑の三点に要約される。それでも牛河の肉体は、彼自身を「これ以上失うべきものは何もない」地点にまで追いやってしまう。それは牛河が「あまりにも牛河であり、そこにほかの仮定が入り込んでくる余地はなかった」からだ。

かつて村上は、「都市によって選択肢を、あたかも自分が主体的に選んでたような錯覚」¹⁸⁾のことを「選択幻想」¹⁹⁾と呼び、「あたかも我々はこれらの順列組合わせによって生ずる無数の可能性のひとつを主体的に選択して生きていると思ひこまされる。しかし(中略)都市や農村の論理の頭上にはそれらの規範を超えた国家の論理が厳然とそびえ立っている」¹⁹⁾と述べた。

山岡頼弘は、以上のような村上論文を援用して、(BOOK3)の主題が「都市幻想と国家論理のせめぎあいにある」²⁰⁾と述べる。山岡によると、天吾や牛河は『選択幻想』によって人生が作り上げられた人間であり、「また天吾の父は、NHKという国家論理を体現した人物なのだ。そうした天吾の父の死は、『国家幻想の傘から天吾を解放』²⁰⁾することになる。が、一方で『牛河の死は、その機縁を獲得できなかったものが直面する『出口』のない憤死をあらわしていた」²⁰⁾

と結論づけた。しかし牛河は、深田保が「個人的に連れて」きた人物である。すなわち牛河は、さきがけという新興宗教の「王」の規範と秩序に外部から揺さ振りをかけ、あるいは硬直した教団と外部の摩擦を減じるために「足を使って」動き回る「道化」の役割を担う。そう考えると牛河の「目立つ外見」もまた、「愚か者」を演じるには適している。たとえば彼の服装一つ取っても、「スーツもネクタイもシャツも、少しずつサイズが合っていない」。それは牛河が選択を誤ったのではなく、それより他に選択の余地などありはしないからだ。牛河が如何に有能な人間であろうとも、いや有能であったからこそ、彼は道化を演じられるのだから。つまり牛河の容姿や振る舞いの端々が、さきがけの「狂信的な人々」への風刺になっている。そうすると、さきがけの「二人の若い男が（中略）細部のサイズが微妙に合っていない」スーツを着ていることと、牛河の着こなしとは似て非なることがわかる。だからこそ牛河は、「システムから離れて自由に行動することが」許され、なおかつ深田保と「個人的」な関係をもつ部外者であった。とはいえ深田保以外の「狂信的な人々」からしてみれば、牛河は煙たい存在であつたらう。

その死に関しても、タマルによつて両手両足を縛られた牛河は、ビニール袋を顔全体に被せられ、芋虫のごとく蠢きながら死んだ。死の直前まで、牛河の面目は大きく見開かれている。死後にすら、「瞼だけはどうしても閉じることができなかった」のだ。つまり牛河は最後まで、あまりに残酷な現実から目を逸らしていない。それは彼が、自らの弱さと向き合える人間であつたからである。どうしてそれを「憤死」などと片付けられるだろうか。ましてや「生贄」でもなければ、「捨て石」でもない。よしんばそうだとして、牛河が空気さなぎに変容を遂げることをどう説明するのか。しかしこの問題に言及した論考は寡聞にして見当たらない。その一端を明らかにするために、牛河の問いかけに耳を傾けたい。

なぜ俺がこんなみつももないところで、こんなみつももない格好で死んでいかなくはないんだ。もちろん答えはない。

牛河の根源的な自問の手掛かりがあるとすれば、それは彼が最後に思い浮かべた「ろくでもない小型犬」であろう。タマルの弁を借りるまでもなく、牛河は「はぐれ犬」であり、社会からはつまはじきにされ、中央林間の家族を「突然

の暗転」によって失つてゐる。換言すれば、牛河自身が魂の行き場を失つた喪家の犬に他ならない。だからこそ、二人の娘をさしおいて、そのろくでもない犬に「何か」を託したはずだ。したがって牛河によって仮託された「何か」の内実を明らかにせねばなるまい。

三 視線の行方

ジョージ・オーウェル『一九八四年』²²は、ビッグ・ブラザーが支配する全体主義の近未来を描いたディストピア小説であり、本作のプレテクストとして広く読まれてきた。ビッグ・ブラザー率いる党の真理省に勤務するウィンストン・スミスは、党中枢の一員であるオプライエンに「強く惹かれ」ている。それはオプライエンが「政治的に完全に正統ではない」という密かに抱いた確信があつたからだ。しかし党員は常に監視されており、ウィンストンがオプライエンに近づくのは容易ではない。そこでウィンストンは、視線による対話を試みる。

一秒間、いや二秒間、二人は曖昧な視線を交わした。それで話は終わりだつた。しかし閉じ込められた世界で生きていかななくてはならないものにとつて、それは忘れられない出来事だつた。

こうしてウィンストンは、オプライエンと何度か視線を交わす。それはウィンストンにとつて、「二人の心が扉を開き、双方の考えが目を通して互いのなかに流れ込んでみるみたいだつた」のであり、また「二人のあいだには相互理解の絆があり、それは愛情や党派心よりも重要なものだつた」という。つまりウィンストンは、オプライエンとの視線による対話を通じて、刹那的であつたにせよ（魂の渴き）を満たしたと考えることができる。それがウィンストンの一方的な思い込みに過ぎず、オプライエンが彼を裏切ることになるとしても。

このような「魂の交流」は、牛河の章では繰り返し登場する。前掲の中村は、牛河とふかえりの視線による対話を取りあげて、牛河は「ふかえりを愛し」ていたと述べた。しかし少女の漆黒の瞳が映すのは、牛河の魂の暗部である。つまりふかえりは、牛河の「内部に生まれたその見覚えのない空洞」を気づかせたにすぎない。とはいえその空洞は、

「ずっと以前からそこにあつたもので」ある。そして少女の視線が残っていたのは、魂の「疼き」であり、「無力感」であり、そして「憐憫」であつた。かつて牛河は、「俺は言うなればソーニャに出会えなかつたラスコーリニコフ」と語つたことがある。

聡明な牛河は、あれこれ思索に耽るが、現実はその遙かに凌駕してゆく。頭上には二つの月が出現し、そのうえ青豆と天吾のような出会いにも恵まれない。牛河には、ラスコーリニコフの場合のように、思考の範囲よりも、現実が遙かに広いことを教え、自己を根底から支えてくれるソーニャのような存在がないのだ。だからこそ牛河は、自らを「ソーニャに出会えなかつたラスコーリニコフ」に喩えるのであり、恋愛感情よりそうした彼のうつろな内心にこそ目を向けるべきだ。

牛河が「無力感」に苛まれるのは三度である。一度目は前述のふかえり、二度目は「コウモリ」の使いの「若い女」が牛河の事務所を訪れる場面である。この名もなき女性は、報酬と引き換えに資料を手渡し、その場を立ち去る。その間にこの女性がしたことといえば、「明るく親しげに微笑んだ」だけである。にもかかわらず、牛河は次のように述懐している。

牛河は、その書類の束の前にして深い無力感に襲われることになつた。（中略）それはどれだけ目をこらして覗き込んでみても底が見えないほどの無力感だつた。（中略）これもあの女が残していった何かのせいかもしれないと彼は思った。あるいは持ち去つていった何かのせいかもしれない。

念のために書き添えておくが、これは青豆の捜索が難航していることへの「無力感」だけではない。「若い女」もまた裏稼業に身を置く人間であり、牛河を前にしても臆することなく、「営業用の微笑み」を用いることができる。そしてその女の「微笑み」は、牛河の「魂の一部を持ち去つたのかもしれない」と感じさせることになる。こうした「若い女」やふかえりの場面からは、牛河が、如何に他者との人間的なつながりを絶たたれているかがよくわかる。

振り返つてみれば（BOOK3）は、二人組で行動する「背の低い坊主頭の男」の「煙草は吸わないでいただけますか、牛河さん」という一言から始まる。「コウモリ」もまた、電話越しに「牛河さん（中略）、煙草を消していただけま

せんか？」と呼びかける。「坊主頭の男」は「さきがけ」という組織に属し、「コウモリ」は「牛河よりも更に薄暗い世界を生息場所としている」が、「若い女」のような仲間がいる。それは彼らが共同で仕事にあたつており、しかるべき規律を共有していることを意味する。つまり煙草を吸うという行為が、彼らの規律に抵触したのだ。しかし牛河はつねに一人であり、彼のアイデンティティーは自己自身以外には求められない。

牛河はだからこそ、徹底した二ヒリストであった。彼は社会の暗部に潜みながら、自分と他者との関係を指の隙間からつねに観察している。そして牛河は、その指の隙間から見たものしか信じない。したがってそこには神も存在せず、愛も存在せず、罪も存在しない。だから彼には、ほんとうに他者を愛することができない。つまり牛河を脅かす「無力感」とは、彼が他者を愛することの不可能性によるものだ。少年時代にまで溯つても、牛河は授業中に一人の女の子の「背中」ばかり眺めている。もちろんその女の子と「口をきいたことは一度もな」かった。それとは対照的に、十歳の青豆は天吾の手を握りしめ、二人は視線を交わす。この出来事は、「生まれてから誰かに愛されたこともなく、誰かを本当に愛したこともなかった」二人を強く結びつける。少女と少年は「生命の温もり」を分かち合う。それから「二十年間という歲月」の流れは、青豆と天吾の愛を深めてゆく。翻つて青豆とは異なり、牛河には愛が欠落している。それは他者が彼を愛さないためではなく、彼が他者を愛さないために生じる。おそらくふかえりの「無言の憐れみ」は、そこに向けられていたのである。

こうして、牛河は次第に、自らの意識さえも疑わずにおれなくなる。青豆の居場所を突き止めるべく、天吾のアパートを見張る牛河は、「風景に含まれる事物のすべてが『意味のないもの』であり『あつてもなくてもいいもの』であるように思えてきた。それともそこにある風景そのものが、もともと実在しないものなのかもしれない」ほどに。こうした事物に対する懐疑は、おのずと彼自身の存在の危機へと照応している。かくして三度目の「無力感」が牛河を襲う。

老人はカーディガンを着てウールのズボンを穿き、背筋をしゃんと伸ばしていた。律義な白い犬を連れていくと似合いそうだが、アパートで犬を飼うことは許されていない。老人がいなくなると、牛河はわけもなく深い無力感に襲われた。

これはもつとも不可思議な「無力感」である。彼は老人が犬を連れていかなかったために、自らの無力を感じているからだ。本来、老人が犬を連れていようといまいと、彼には何の関係もない。かりに老人が犬を連れていたとしても、青豆の居場所にはつながらないからだ。しかし牛河には、そこに犬がいらないという「空白」が、彼に「無力感」をもたらしたと考えることができる。つまり牛河にはその犬が、郊外の一軒家での幸福な暮らしの象徴として映っていたのではないか。だからこそ彼の半生の追憶は、かつて牛河家で飼っていた「小さな芝生の庭を元気にかきまわる小型犬の姿」に帰するのである。牛河少年が心を許すことができたのは、「賢い雑種犬」だけであった。その少年は大人になつたいまでも、自分の二人の娘ではなく、一度として好くことも、そして好かれることもなかったはずの「ろくでもない小型犬」に自らの願いを託すことしかできない。しかしそれは裏を返せば牛河が、最後に希求した「何か」を語っている。すなわち牛河の渴求は、無条件に心から他者を愛し、そして心から他者に愛されることに他ならない。ところが現実には、自らの存在の感触をたしかめるすべも、普通の時間や場所さえも彼には残されていない。そこでついに、二つの月が登場するのである。

四 二つの月

牛河の前に姿を現した二つの月は、次のように描かれている。

いつもながらの冬の月だ。冷ややかで青白く、太古から引き継がれた謎と暗示に満ちている。それは死者の目のようにまばたきひとつせず、黙して空に浮かんでいる。

やがて牛河は息を呑んだ。（中略）そのいつもの月から少し離れたところに、もうひとつの月が浮かんでいることに気づいたからだ。それは昔ながらの月よりはずっと小さく、苔が生えたような緑色で、かたちはいびつだった。

この二つの月が見えるのは、牛河、天吾、青豆、ふかえり、深田保の五人だけである。超自然的な力を有する深田保を除くと、三人の主人公とふかえりは、それぞれに根源的な愛の欠如によって、二つの月が浮かぶ世界に導かれる。牛

河は、心から誰かを愛すること、あるいは心から誰かに愛されることに見放されている。天吾は、NHKという管理システムを内在化した非人間的な父親から愛の実感をえられず、母親と若い男の幻影に悩まされてきた。それは彼が、「父親と称する人物の生物学上の子供ではないことを証明する」ための記憶でもある。青豆は、両親が「証人会」の熱心な信者であり、そのために小学校で孤立した。また彼女は背教のために家族から絶縁されている。そうした愛の欠如から、青豆は自らの肉体を神殿に見立て、人を殺せるまでに鍛え上げる。彼女の個人的な信仰は、愛ではなく、暴力へ向かってゆく。ふかえりは、両親とともに小さな共同体で生活していた。そのような少女のまえにリトル・ピープルがやってくる。が、リトル・ピープルに身の危険を感じたふかえりは、その共同体を抜け出す。それでもリトル・ピープルはふかえりの夢の中にまで侵入し、彼女のまわりの人間を損なうてゆく。そのために彼女はさらなる孤立を余儀なくされる。この五人の関係性を簡略にまとめると次のようになる。

ふかえりと深田保は父娘であり、性的関係を結んでいる。またそのふかえりと天吾も肉体関係にある。天吾と青豆に性的関係が成立するのは（BOOK3）末尾であり、二人が1Q84の世界から、月が一つの世界に復した後である。にもかかわらず、なぜかそれ以前に青豆は天吾の子を宿している。青豆の「一種の処女懐胎」について平野芳信は、「天吾は深田保の実の子である。だからこそ、深田保を殺害したまさにその日に青豆は天吾の子（中略）を受胎した」と述べた。その理由として平野は、天吾とその育ての父親とは、「姿形・精神的な資質や傾向のどれをとっても似ているところがな^①」いと指摘している。が、天吾の造形に関しては、「身体が大きく（中略）、農夫のような目をしてきた」とあり、これは「東北の農家の三男に生まれ」た父の身体的特徴を引き継いだものだ。そして天吾の生まれつき「頑健な身体に^②」についても、父の「強みは身体が丈夫なこと、我慢強いこと」に呼応している。牛河と親兄弟、あるいは二人の娘がそうであったように、「現在父と天吾が似ていないことは、必ずしも親子関係を否定することにはならない^③」（中村三春）のだ。とはいえ天吾が、象徴的な意味での〈父性〉をリーダーから受け継いだということができる。なぜなら天吾だけが文章を書くこと、あるいは書き直すことができるのであり、それは権威の象徴に他ならない。したがって深田保の死後、物語は、天吾の願望充足に向けて動き出すのである。

こうした天吾と性的關係を持つふかえりと青豆を除けば、残る牛河だけが、大小二つの月が見えていることになる。そして彼の「魂の一部」だけが、空気さなぎに変わるのだ。なるほど天吾とふかえりは空気さなぎを見ることができ、なおかつふかえりは、自らの空気さなぎをつくることもできる。青豆にいたっては、天吾が目にする空気さなぎのなかに包まれていた。しかし自らが、空気さなぎに変容を遂げるのは牛河だけである。だとすれば牛河だけが、なぜ空気さなぎに変容するかが問われねばならない。そうすればおのずから、二つの月やリトル・ピープルについても明らかにするだろう。以下、考察を試みんとするところである。

五 救われる者、救われない者

二つの月を目にしてから、牛河を「睡魔」が襲う。「普段の彼は必要とあればいつまでも起きてい」られたが、このとき彼の網膜には大小二つの月の「シルエツト」が焼きついていた。彼の脳内には、「蜂が大きな芋虫を刺して麻痺させ、その体表に産卵する」「不吉な想像」がよぎる。こうした想像は、タマルによる牛河の惨劇を予想せざるをえない。朝鮮人のタマルは、終戦に伴って樺太から引き上げ、北海道の孤児院で育てられた。その施設でタマルは、ネズミの彫刻しか作らない子供に出会う。ネズミという弱さの象徴を彫り出す少年＝社会的弱者を守ることが、タマルの「立場」を確立する。つまりタマルの存在理由とは、誰かを守ること（「セキユリテイ、主にボディーガード。」）である。それは老婦人の警護であり、ひいては青豆の安全を確保することになる。そして彼は牛河と同じく、チームプレーを好まず、任務遂行のためなら手段を選ばない。両者は「お互いに一匹狼」であり、「あるいははぐれ犬」である。にもかかわらず、タマルは殺す側であり、牛河は殺される側であった。そこに救いを見出すのは難しい。なぜなら、さきがけに移送された牛河の「遺体に対する敬意や哀悼の念が、その部屋に漂うこと」すらなかったのだから。

牛河の死体は、その遺体でさえ「無個性で実務的に見え」る部屋に置かれている。そこにリトル・ピープルは、複数人でやってくる。その数は六人でも七人でもかまわない。ただし一人ではない。そして彼らは「ごく当たり前の顔を」

しながら、「同じ動作」で「同じ色の同じ長さの糸」を空中から取り出す。その「白に近いクリーム色で半透明」の糸は、「二本の牛河の頭髮」とともに紡がれてゆく。いつものリトル・ピールならば、その間に「ほうほう」とはやしったり、喋ることもできるのだが、なぜか「無言」である。それは彼らが、牛河の精神の暗部、あるいは「魂の影」を通過しているからだ。

彼らは小さな身体に小さな服を着て、緑色の苔のはえた舌を踏みしめ、汚れた乱杭歯をまたぎ、順番に外に出てきた。

牛河は饒舌な人物である。しかし彼は他者と精神的に断絶していた。そのため喋ってはいるが、他者と交流をもつことができない。その象徴として、牛河の舌には厚く苔が生えている。そうした不浄を通り過ぎたにもかかわらず、リトル・ピールは「汚れや摩耗とは無縁の人々だった」という。つまり彼らは、空気のように無色透明な存在だ。しかし現代では、その〈空気〉が力をもつのである。だからこそ、彼らは一人では何もできない。が、複数人で集うことによつて、青豆の友人「あゆみ」の「脆弱な部分」や、ふかえりの友人「トオル」の「もつとも弱い部分」を無意識から引きずりだし、二人を滅ぼしてしまう。たとえばリトル・ピールは、トオルの「意識の奥底から三匹の黒い蛇を引きずり出す」のである。

そのさなぎの中にいるのは三匹の大きな黒い蛇だ。三匹の蛇はお互いにしつかりと絡み合っていて、誰にもいはいは彼ら自身にもーそれを解きほぐすことはできそうにない。彼らは頭が三つあるぬめぬめとした永遠のもつれのように見える。

これは明らかに創造と破壊を司るウロボロスだが、ここでは破壊の役割を担う。その一方、リトル・ピールが創造を担う場面もある。彼らは天吾に「彼自身、空気さなぎ」を与え、その中には「十歳の少女」の青豆が内包されていた。それは天吾が、何よりも欲しかったものである。深田保もまた、リトル・ピールから人智を超えた力を授かる。つまりリトル・ピールとは、1Q84の影の統治者⁽²⁶⁾であり、深田保や天吾の無意識の欲望を引きずりだし、その無意識の力を利用してことで猛威をふるう。そして深田保のように、超現実のレベルにまで達した統治願望を利用して、弱者の無意

識に侵入するのである。すなわち、リトル・ピープルは何者でもない。にもかかわらず、人々を支配するようなその場の状況をつくりだすことができる。その象徴的存在が空気さなぎ⁽²⁷⁾であろう。

牛河にまつわる問題の本質は、牛河の「不幸かつ不運⁽²⁸⁾」な死を読者が如何に受け止めるかにある。牛河は、読み手に「何かを問いかけ」ている。それは「答えの返ってくるあてのない純粹な疑問のようなもの」であった。牛河の死亡後、その両目を閉じることは誰にもできない。なぜ、青豆と天吾は救われ、牛河は救われないのか。あるいは、もつとも無惨な者がなぜ、もつとも悲惨な死に遭わねばならないのか。こうした彼の問いかけによって開かれた世界は、読み手の応答によってのみ閉じられる。だからこそ牛河は、抑圧された無意識の具現化である空気さなぎに変わらねばならない。また牛河の空気さなぎの正体が明かされないのは、本作の続編を示唆してもいなければ、謎解きを要求しているわけでもない。牛河の空気さなぎの内実は、読み手の応答によってのみ開かれ、そして意味を持つからだ。だとすれば彼の両目を閉じることは、読み手の責務ではないだろうか。

牛河の目と照応するのは、大小二つの月である。二つの月の眼差しは、焦点の失われた世界に均衡を取り戻そうとしているかのようだ。しかし「月たちの目」は雲に覆われ、天吾と青豆は、月が「ひとつきり」の世界に移動する。つまり天吾と青豆の愛の成就によって、二人の根源的な欠損は復され、月が一つの世界に戻ってしまう。その一方、取り残された小柄な牛河と小さな月には、いくつかの共通項がある。たとえば「いびつな頭」の牛河の舌には、緑色の苔が生えていたが、かたや小さな月も、「いびつ」で「苔が生えたような緑色」をしている。そして牛河が「緑色の苔を」舌に発見するのは、二つの月を「長く見つめ」ながら、「その光を肌染みこませすぎた」あとのことだ。すなわち、両者は誰に望まれるでもなく、その姿を突如としてあらわにし、大きな月（青豆と天吾）の外縁に位置するが、邪魔になれば簡単に切り捨てられてしまうのである。

このように考えてくれば、牛河は小さな月のように、物語の不条理性を一手に引き受ける存在と意味づけられるであろう。牛河を惨殺する寸前にタマルは、ボーリンゲンにあるユングの建物「塔」に刻まれた「冷たくても、冷たくなくても、神はそこにいる⁽²⁹⁾」という言葉を口にした。タマルは殺す側でありながらも、殺される側の痛みもわかる。だから

こそ、ただ殺すのではなく、牛河にこう語りかける。タマルには孤児院から一貫した存在理由があり、それが彼の生き方を肯定するのであり、そこに他者とのコミュニケーションが生まれるのだ。しかし牛河には、最後まで語るべき言葉がない。したがって牛河は、ユングの銘文を復唱はするが、心には何の影響も与えない。二ヒリスト牛河は、死に際して神に救いを求めない。その代わりに牛河は、自らと同一視する「犬の姿」を思い浮かべる。

その瞳が生きている最後の瞬間に見ていたのは、中央林間の建て売りの一軒家であり、その小さな芝生の庭を元気にかけまわる小型犬の姿だった。

どこまでも「リアリステック」な牛河であったが、もう生の世界に留まることは許されない。かといって死後の世界に行くこともできない。彼の両目は、今なお開かれているからだ。そこに現れたリトル・ピールは、もつれた糸のように「縮れた毛髪を」抜き取り、牛河の人生のもつれを解きほぐすようにして、空気さなぎを紡いでゆく。そして生と死の間で宙吊りになった牛河の魂は、空気さなぎに変貌する。そこに内包された無意識の渴望は、無条件に心から他者を愛し、心から他者に愛されることに他ならない。それは普通の「一軒家」で実現されるような、あるいは一般の「小型犬」に与えられるような、何の変哲もない愛の物語だ。青豆と天吾が織り成す深い愛の物語に比べれば、ほんのささいな愛の物語である。そんな愛の物語でさえ、牛河には与えられないのだ。

かくして、現代の悲惨さを一身に引き受けたのが牛河の生涯であったと^⑩いうことができるだろう。牛河の空気さなぎは、現代社会に潜んでいる渴望の象徴に他ならない。牛河の死は、その見開かれた両目によって、根源的な問題を我々に問いかけ続けている。だとすれば、最初に見た小森の批判が無効であることが了解されよう。『1Q84』は、その壮大な虚構性によって、現代社会に深い問いを投げかけているのである。

注

(1) 『1Q84BOOK1』、『1Q84BOOK2』(新潮社 二〇〇九年五月)、『1Q84BOOK3』(新潮社 二〇一〇年四月)。以下本

文引用は同書による。

- (2) 加藤典洋 「「桁違い」の小説」『文學界』文藝春秋 二〇〇九年八月。
- (3) 内田樹 「父」からの離脱の方位」『もういちど村上春樹にご用心』文藝春秋 二〇一四年二月。
- (4) 宇野常寛 『リトル・ピープルの時代』幻冬舎 二〇一一年七月。
- (5) 小森陽一 「『1Q84』と漱石をつなぐもの」『群像』講談社 二〇一〇年六月。
- (6) 沼野充義は、「『1Q84』は絶対者としての父」神を最初から欠いた世界なのである」（『文學界』文藝春秋 二〇〇九年八月）と指摘している。
- (7) 村上春樹 「るつばのような小説を書きたい」『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです村上春樹インタビュー集1997—2011』文藝春秋 二〇一二年九月。
- (8) C・G・ユング 「文学と心理学」『現代思想四月臨時増刊号』第七巻第五号 松代洋一訳 青土社 一九七九年四月。
- (9) 村上春樹 「壁と卵」—エルサレム賞・受賞のあいさつ『雑文集』新潮社 二〇一一年一月。
- (10) 島田裕巳 「これは「卵」側の小説なのか」『村上春樹』1Q84』をどう読むか』河出書房新社 二〇〇九年七月 参照。
- (11) 黒古一夫 「『1Q84』批判—村上春樹はどこへ行く」『1Q84』と現代作家論』アーツアンドクラフツ 二〇一一年二月。
- (12) 中村三春は、「受賞スピーチという片々たるエッセーと、小説テクストを自由に結びつけて論じる手法には、基本的なテクスト操作上の問題がある」（『ライティング・スペース』1Q84』BOOK1・2からBOOK3へ）『村上春樹表象の圏域』『1Q84』とその周辺』森話社 二〇一四年六月）と指摘している。
- (13) 河合隼雄 「現代の物語とは何か」『こころの声を聴く—河合隼雄対話集』新潮社 一九九八年一月参照。
- (14) 石原千秋 「村上春樹『1Q84』を読む」『読売新聞』二〇一〇年五月。（http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/opinion/culture_100426.htm）二〇一八年七月三〇日閲覧）
- (15) 堀口真利子は、「キャッチコピーや批評、研究領域における『1Q84』の本筋は、大方、『究極のラブストーリー』としてのイメージを強く読者に与え」（『1Q84』における暴力表象女同士の連帯と親密性をめぐって）『村上春樹表象の圏域』『1Q84』とその周辺』

森話社二〇一四年六月）たと述べている。

- (16) 円堂都司昭「『牛河』という人生『1Q84』で名探偵になりそこねた男」『ユリイカ』一月臨時増刊号青土社二〇一一年一月。
- (17) (一)に同じ。
- (18) 村上春樹「対話R・チャンドラーあるいは都市小説について」『ユリイカ』七月号青土社一九八二年七月。
- (19) 村上春樹「都市小説の成立と展開―チャンドラーとチャンドラー以降―『海』中央公論社 一九八二年五月。
- (20) 山岡頼弘「都市幻想を越えて」―『1Q84』と『グレート・ギヤツピー』『文學界』文藝春秋 二〇一〇年七月。
- (21) 「道化の機能を考えるには、それを王と対比させてみるのが非常に効果的である。道化はいわば影の王としての意味を強く持っている。(中略)王は自らを完全に光り輝く存在とするために、その影の部分の切りはなして道化という人格を作り出したのである。」(『影の現象学』講談社 一九八七年二月)。つまり河合論を敷衍すれば、牛河は、深田保の影の部分を引き受けていたことになる。また亀山郁夫は、牛河が「トリックスター」(「男性原理と女性原理の終末戦争」『文學界』文藝春秋 二〇一〇年七月)であることをすでに指摘している。
- (22) 高橋和久訳 早川書房 二〇〇九年七月。以下本文引用は同書による。
- (23) ただし青豆は人殺しであり、愛が深まれば、罪も深まらねばならない。青豆と同じく、ラスコーリニコフが「正しいこと」のために人を殺し、罪の感覚に苦しんだように。ところが青豆からは、罪が欠落している。この問題については、稿を改めて論じたい。
- (24) 平野芳信「『1Q84』論―村上春樹のゆくえ―」『村上春樹と小説の現在』和泉書院 二〇一一年三月。また、平野『村上春樹―人と文学』(勉誠出版 二〇一一年三月)にも同様の指摘がある。
- (25) 書くことの特権性については、すでに指摘がある。たとえば、小野絵里華「(主権)は繰り返し返される―『1Q84』における(性)と(血)をめぐる―」(『1Q84スタディーズBOOK2』若草書房 二〇一〇年一月)、小松原孝文「B・Bはもういらぬ―『一九八四年』と『1Q84』(同上)。
- (26) 河合隼雄は、集団の影を背負わされる者について次のように述べる。「影は成員のなかの少数の人の意識に侵入し始める。集団の影を背負うことを余儀なくされる人は、どのような人か、強い人か弱い人かは容易に断定しがたい。ともかく、結果としてその人は、予言者、

詩人、神経症、精神病、犯罪者になるか、あるいは一挙に影の反逆に成功して独裁者となるか、なんらかの異常性を強いられる。それは誰がなぜ選ばれたかなどという問題を押しつぶして、（中略）人間も自然の一部にすぎないことを如実に感じさせる力であり、そこに人間の意志などどういはいはいいいこむことのできぬものである。」（（二）に同じ）。

(27) 同様の指摘がある。堀井一摩は、「リトル・ピープルが眠っているつばさの口から出てくること、そして夢に現れることから、それは人間の無意識の、内なる欲望の発する声と」して捉え、空気さなぎを「物語のメタファーである」（「村上春樹とカルトの不気味な関係—『1 Q 8 4』の免疫学」『1 Q 8 4 スタディーズ B O O K 2』若草書房 二〇一〇年一月）と述べた。また井上順孝は、「空気さなぎは生と死に関わる。生と死、愛。このもつとも普遍的で、深く心動かされる現象に際して出現する謎の存在である」（「見かけから自由になれるか？—信仰が紡ぎ出す「二つの世界」」『1 Q 8 4 スタディーズ B O O K 1』若草書房 二〇〇九年十一月）と言及している。

(28) 村上春樹「胸の中の鈍いおもり事件終わっていないオウム13人死刑執行」『毎日新聞』二〇一八年七月。<https://mainichi.jp/article/Ies/20180729/dtm/003/010/004000c> 二〇一八年七月三〇日閲覧）

(29) これは誤った引用である。キュッスナハトの家の扉には、「呼ばれようと、呼ばれまいと神は存在する」（C・G・ユング『ユング自伝 2』河合隼雄 藤縄昭 出井淑子共訳 みすず書房 一九七三年五月）と刻まれている。

(30) フランスの詩人ジュール・ラフォオルグの『ピエロたちのしゃべることば』（『世界名詩集（全26巻） 16レニエ／ラフォオルグ最後の詩聖母なる月のまねび』青柳瑞穂 吉田健一 伊吹武彦 中江俊夫 宮内侑子共訳 平凡社 一九六八年十一月）は、牛河の生涯を意味づける上で、重要な示唆を含んでいる。その一部を抜粋して引用する。

いったいいつあなたの両眼の沼は 送りとどけてくれるのか

僕の高貴な魂の昇る月を？

（中略）

またぼくらピエロのひとりが死んだ。

慢性孤児病のために死んだ。

そいつはおかしな体つきの、

月のダンディズムに満ちた心をしていた。

ラフォオルグの〈ヒエロ〉と〈月〉は妖しく絡み合う。牛河と小さな月もまた重なり合うが、しかし大衆の耳目を引くのは大きな月である。その傍らで誰からも見咎められず、苔むした月の姿は、大きな月の裏側を見るかのようだ。かつて村上は、「月の裏側に一人残されていたような恐怖を自分のことのように想像しながら、その状況の意味を何年も考え続けた。それがこの物語の出発点になった」(『1Q84』への30年上月の裏に残されたような恐怖)『読売新聞』二〇〇九年六月一六日)と語っている。

*本稿は、日本キリスト教文学会九州支部夏期セミナー(二〇一八年八月二〇日)における口頭発表を基盤として、原稿を加筆、訂正したものである。